

## <テロ後1年の米国> 凋落と流動と未来(中村 伊知哉)

あの瞬間、世界は拡散した。アメリカ本土が直接の攻撃を受けるとは思いもよらなかった。その意外さがアメリカを相対的に見つめ直し、ひるがえって世界の多元性を再び認識することを迫った。



90年代のアメリカ絶対主義に区切りがついて、またも地球は流動化した。フランスではル・ペンが大統領選の決戦に進出するほどの右傾化をみせ、中東では衝突が拡大した。エンロンやMCIワールドコムに代表される株価市場主義は無様に破綻し、世界経済を減速させ、アメリカの威信は回復しないままだ。

この4-6月期の米ベンチャーキャピタル投資は前年比マイナス53%、ネットバブル前の水準に落ちたという。特に通信クラッシュは深刻である。2000年のネットバブル崩壊は、いよいよインフラ事業の崩壊まで駒を進めた。病が肉から骨に進んだ。

### ■失敗の烙印を押されようとしている競争政策

MCIといえば、かつてAT&Tに対抗する唯一の電話会社として80年代の通信政策を彩った勇者だが、ワールドコムに買われた末路、粉飾決算を最後に退場する。片やAT&Tは進出したケーブル事業をコムキャストに売却することになった。勃興したグローバルクロッシングも、エキサイト・アットホームも姿を消す。FCCパウエル委員長は、過去2年間に通信市場では数十社が倒産し、50万人が失職し、時価総額が2兆ドル下がったと告白する。

そして、ベル系市内通信会社が残った。ヴェライゾン、ベルサウス、SBC、といった企業が一人勝ちしている。96年電気通信法以後の政策、いや80年代から胸を張って進められてきた競争政策が、失敗の烙印を押されようとしているのだ。

その一連の規制緩和は、投機をあおった行き過ぎの政策だったのか、ベビーベル独走を招いた不十分な政策だったのか、評価が分かれるところだ。しかし、競争主義者の口から日本の「管理された競争」をいまさら再評価する声を聞いたりすると、始末の悪い思いがする。

### ■デジタルの運動は始まったばかり

同時にこの一年は、メディア巨艦の凋落もみられた。AOL-TWIはインターネット事業の不振から株価が下がり、世界第二のメディア企業ビベンディは巨額の負債で株価が暴落、7月にはメシエCEOが退任している。M&Aを軸とする垂直統合型のビジネスの行き詰まりだ。コンテンツからネットワークまでの垂直統合かモジュール的な水平分業かをめぐり、90年代を通じてみられたビジネスモデルのせめぎあいには終止符が打たれるのだろうか。

いや、政策の失敗であるとか、ビジネスモデルの収束であるとか、そのような結論はまだ早計であろう。デジタルの運動は始まったばかりで、これからが本番だ。流動化して、次が見えにくくなっているだけだ。

いずれにしろ、ここ1年で話題になった大型のズッコケ劇は、借金苦に悩む成金を思わせ、庶民の同情を引くもの

ではない。結局、通信は安ければよい。産業や生活の血肉になればよいのであって、通信会社がどうなろうと構わない。

アメリカは、失敗したのか。春先にIIJの鈴木社長に尋ねてみた。「でも結局、アメリカにはインフラが残った。日本からもカネを吸い上げて、高度なインフラを作って、つぶして安く買いたたいて使えるようにする。これが一番かっこいいとも言える。」そうかも、しれない。

#### ■国際ネット社会に情報発信する日本の若者

そうだ、アメリカのことより、ニッポンのことを考えなければいけない。アメリカが沈んだ分、日本のパフォーマンスはよさそうに見える。アメリカのDSLが頭打ちなのに対し、いよいよ日本のDSLは伸びてきた。FTTHもある。無線系では、無線LANに遅れをとるものの、第三代携帯電話、CS110度、そして蓄積型放送という日本チックなメディアが登場してきた。むろんケータイインターネットでは世界をブッチぎっている。

一方、政策面では進展が少ない。放送のハード・ソフト分離や通信・放送融合などを唱えた政府IT戦略会議のいわゆる宮内ペーパーは無視され、構造問題には手がつけられていない。デジタル放送や住基ネットは問題を指摘されながら既定路線で動き出そうとしている。

しかし、次につながる動きもある。たとえば宮崎駿「千と千尋の神隠し」がベルリン映画祭でアニメ初のグランプリを獲得し、ついでにタイタニックを破って国内興行成績の記録を打ち立てた。日本のアニメ制作力・鑑賞力が国際的なプレゼンスを高めている。

もう一つは、昨年末、米タイム誌がマン・オブ・ザ・イヤーを公募したところ、オサマ・ビンラディン氏を抑え、田代まさし氏が堂々の一位に輝いた事件だ。ネット掲示板「2ちゃんねる」のオンライン・コミュニティが投票した結果だという。タイム誌はこの栄誉あるイベントのページを削除するハメになったという。

それはエスタブリッシュメントたる米マスコミが極東の草の根ネットに凌駕されたというだけでなく、日本の若い連中が国際ネット社会に情報を発信していく意思表示ととらえれば、不謹慎だが傑作である。次世代のクリエイティビティが芽吹いている予感がする。

#### ■いよいよ本質が問われてくる

サッカーのワールドカップは、非アメリカ中心的で多元的な世界を4年ごとに認識させてくれる。今回の決勝は、南米と欧州であった。そうした世界のプラットフォーム機能を日韓というアジアが担うことができる。それをも認識させてくれた。そして何より、日本の若者が世界を舞台に活躍する姿をみせてくれた。

ユビキタスなピア・トゥ・ピア時代に、どんな情報を創造して、どう発信していくのか。流動化したこの一年のあと、いよいよ本質が問われてくると思う。

#### -筆者紹介-

中村 伊知哉(なかむら いちや)  
スタンフォード日本センター研究所長

#### 略歴

1961年生まれ、京都市出身。京都大学経済学部卒。在学中はロックバンド“少年ナイフ”のディレクターなどを務める。84年郵政省入省。電気通信局、放



送行政局、登別郵便局長を経て、通信政策局でマルチメディア政策、インターネット政策を推進。93年からパリに駐在し、95年に帰国後は官房総務課で規制緩和、省庁再編に従事。98年郵政省を退官し、(株)CSK特別顧問に就くとともに渡米、MITメディアラボ客員教授に就任。2002年9月から現職を兼務。経済産業研究所コンサルティングフェロー、(社)音楽制作者連盟顧問、NPO「CANVAS」副理事長を兼務。著書に『インターネット、自由を我等に』(アスキー出版局)、『デジタルのおもちゃ箱』(NTT出版)など。

● 記事一覧

- 労働力不足とロボット社会(築地達郎)
- 通信市場の「ジレンマ」——光ファイバー普及、市場集中を誘発(今川拓郎)
- メディア融合時代における「競争」と「公益」の調和・竹中懇最終報告に寄せて(金正勲)
- IT人材不足を解消するためにすべきことは何か(前川徹)
- 利用者の視点からコンテンツ活性化を考える(大木登志枝)
- 「ネットで働ける」社会は本当に来るのか?(田澤由利)
- 携帯電話の「自己触媒的」発達・グローバル市場で強みとなるか(土屋大洋)
- 産業と融合する通信インフラ——ネットワーク社会の新たなアーキテクチャーとは(荒野高志)
- ネットワークは中立的か?——日米の議論の潮流を読む(谷脇 康彦)
- MVNOの第2ステージが始まった(本荘修二)
- 個人情報保護法から1年で見えてきたこと(高木 寛)
- 知らずにインストールされる「アドウェア」(帆場英次)
- ユビキタス、センシング&コンテキスト化のインパクト(碓井聡子)
- 通信・放送融合 タブー廃しチャンスに変えよ(中村伊知哉)
- これでいいんかい、国の委員会<その6>(関根 千佳)
- 少子高齢化時代のICT利活用への期待(片瀬 和子)
- 「Web 2.0」はパスワードか?(湯川 抗)
- 本当にユビキタスな情報社会へ向けて(土屋大洋)
- 個人情報保護法と暗号(内田勝也)
- 到来した「超」カスタマー・セントリックな時代(江川 央)



NIKKEI NET

新製品

- [パソコン関連](#)
- [ソフト&サービス](#)
- [自動車](#)
- [AV&通信](#)
- [生活](#)
- [ホビー&レジャー](#)